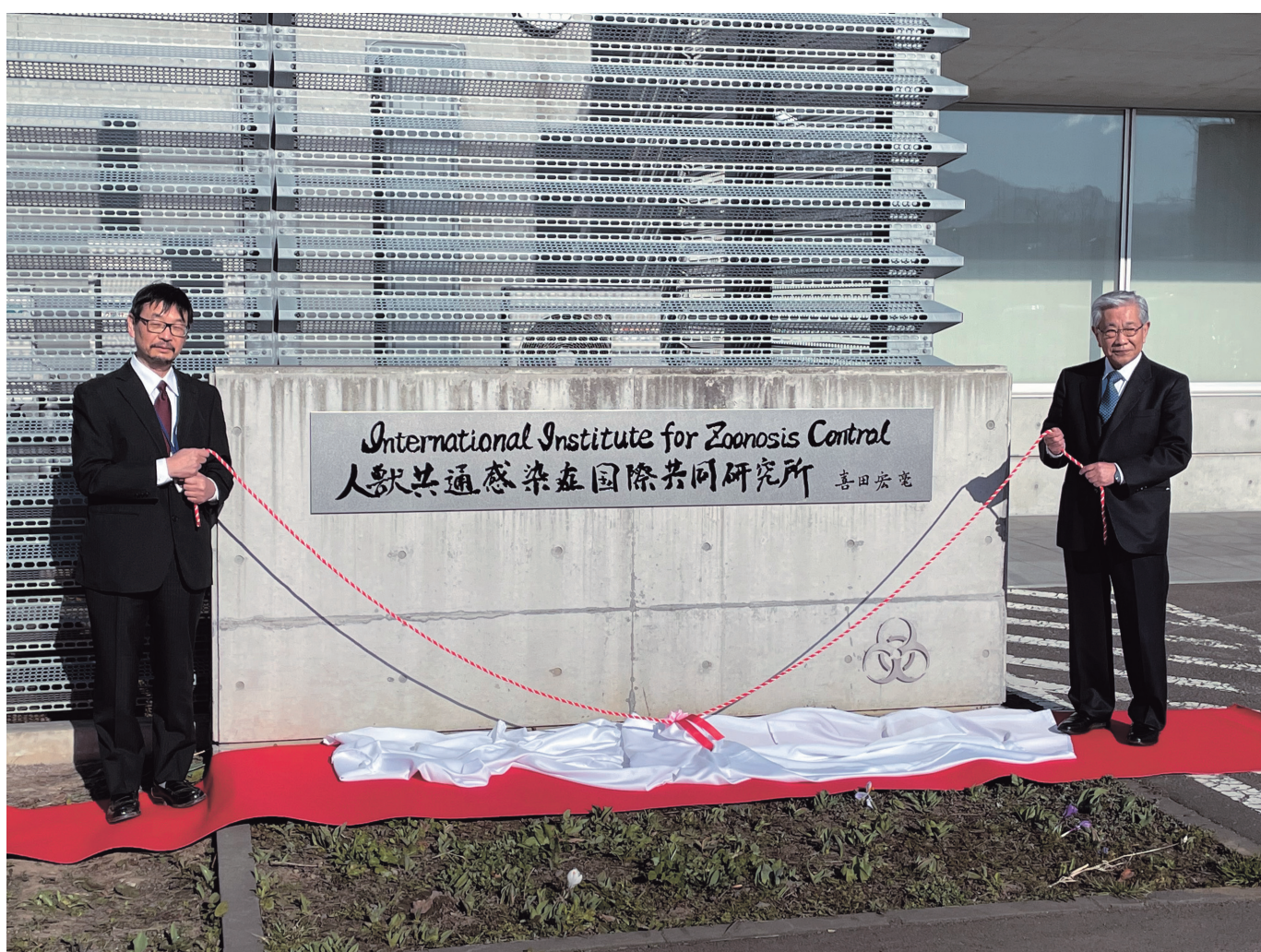


春の叙勲に本学から5氏 第1回 定例記者会見を開催 人獣共通感染症国際共同研究所を設置





「北海道・札幌マラソンフェスティバル 2021」ランナーがキャンパスを疾走



「記者懇談会」を開催

全学ニュース

- 1 春の叙勲に本学から5氏
- 7 One Healthリサーチセンターを共同プロジェクト拠点として認定
- 8 「北海道・札幌マラソンフェスティバル 2021」ランナーがキャンパスを疾走
- 9 「記者懇談会」を開催
- 10 第1回 定例記者会見を開催
- 11 北大フロンティア基金
- 13 北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー称号授与式を挙
- 14 「北海道大学レーン記念賞」に寄附
- 15 寶金総長が清華大学110周年記念式典・世界大学学長フォーラムにオンライン出席
- 16 サブサハラ・アフリカ向けの「大学検索データ・ポータル」の開設

部局ニュース

- 17 「南極学術探検隊樺太犬訓練所」（稚内）の写真画像を大学文書館で受贈
- 18 サッカー部関係資料を大学文書館で受贈
- 19 工学研究院・情報科学研究院・化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）合同シンポジウムを開催
- 20 令和2年度現代日本学プログラム課程学士学位記授与式を開催
- 21 人獣共通感染症国際共同研究所を設置
- 22 北海道大学スマート物質科学を拓くアンビシャスプログラム第1期生採用式
- 23 生命科学院 博士後期課程科目「少人数討論型育成プログラム」（北大帝人プレーストリーミングワークショップ）を実施
- 24 脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙

諸会議の開催状況 25

学内規定 26

人事 27

資料

- 28 役職員数（令和3年5月1日現在）



第1回 定例記者会見を開催



北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー称号授与式を挙



「北海道大学レーン記念賞」に寄附



脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙

表紙：人獣共通感染症国際共同研究所を設置（関連記事21頁に掲載）

裏表紙：キャンパス風景⑭ メインストリート（北9条西7丁目付近）

■全学ニュース

春の叙勲に本学から5氏

この度、本学関係者の次の5氏が、令和3年春の叙勲を受けることについて、4月29日（木）に発表となりました。

勲章	経歴	氏名
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	山田元
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	角田興史雄
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	寺尾日出男
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	新谷融
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	宮本登

各氏の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、授与されたものです。各氏の受章にあたっての感想、功績等を紹介します。

(総務企画部広報課)



やまだ げん
山田 元 氏

感想

この度は、はからずも令和3年春の叙勲の栄を賜り、身に余る光栄と存じます。これもひとえに北海道大学に入学以来、長きにわたる

諸先生のご指導、ご鞭撻、ならびに先輩、同僚、研究室のスタッフ、学生諸君など多くの方々のご協力とご支援の賜と心からの感謝を申し上げます。

工学部機械工学科に進学し、黒岩 保教授担当の熱機関工学第二講座に所属し、卒業論文として「自動車用90馬力ガソリン機関の設計および製図」を提出し、修士課程では、有江幹男教授担当の流体工学講座で修士論文として「気泡ポンプに関する実験的研究」を、三谷将之先生の献身的なお力添えを得て完成させ、昭和40年3月、無事課程修了にこぎ着けました。4月からは、博士課程に進学の予定でした。

一方、理工系大学の拡充に伴い、新設された工学部機械工学第二学科の機械力学講座担当として入江敏博教授が赴任されました。同先生は、助教授の人材を求めて、他大学の関連学科を訪問されたそうですが、当時の札幌への交通事情は、夜行列車で青森へ、ついで津軽海峡を青函連絡船でわたり、さらに函館から列車で・・・ということもあつてか、なかなか人材を捜しきれない状況にあったのでは、というのが私の推測です。そのようなことで困っておいでの入江先生と有江先生との相談の中から、この人事が持ち

上がり、4月から、講師を拝命することになりました。現在では、とうてい考えられないような状況ですが、現実には動き出しました。当人には想像も出来ないような日々が続き、眠られぬ夜も多々ありましたが、入江先生の心温まるご指導とご支援で、何とか続けることが出来ました。流体工学から振動工学への専門分野の変更もあり、必死の毎日でした。もちろん、学位も持ち合わせておりませんでしたので、若かったから何とかこなせたのかなあ、と思っております。

ということで、昭和40年（1965年）から平成16年（2004年）3月までの39年の長きにわたり勤務させて頂き、充実した教師生活を過ごすことが出来ました。

終わりになりますが、これまでお力添え下さいました皆様に改めて心からの感謝を申し上げますと共に、北海道大学の更なる発展をお祈り申し上げ、お礼の言葉と致します。有難うございました。

功績等

山田 元氏は、昭和40年3月北海道大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程を修了し、同年4月北海道大学工学部講師に採用され、昭和41年4月北海道大学工学部助教授に昇任の後、昭和61年4月北海道大学工学部教授に昇任、平成9年4月北海道大学大学院工学研究科教授に配置換になりました。平成16年3月31日限り定年により退官されるまで、機械力学、振動工学の分野の発展に尽くされました。

教育面では、学部においては、機械力学、機械振動学、振動工学、航空工学、機械工学大意第二、応用力学演習、

機械工学演習，固体力学系演習，応用演算工学演習，機械製図（乙），機械工学実験など，また，大学院においては，機械振動学特論，機械力学特論，固体工学特別演習，機械工学第二特論ゼミナール，機械工学第二特別実験第一，機械工学第二特別研究第一，機械工学第二特別研究第二，固体工学特別研究第一，固体工学特別研究第二などの講義，演習，実験を担当されるとともに，学部学生及び大学院学生の研究指導にあたられ，数多くの技術者ならびに教育者，研究者を育成されました。

研究面では，架空索道上を走行する搬器の振動や，自動車の走行性と安定性を，理論計算と計算機シミュレーションによって解析しました。ついで，稼働中の機械において，これを構成する機構や部品間の遊び（ガタ）によって発生する，強い非線形特性を有する衝突振動現象について，衝突ダンパーをモデルとして取り上げ，その振動特性と防振性能を明らかにしました。

また，繊維強化複合材料（FRP）から構成される積層複合円筒殻の自由振動問題を一次せん断変形理論に基づく伝達マトリクス法，リッツ法を用いて理論解析し，その振動特性に及ぼす積層構成の影響を明らかにしました。ついで，積層平板あるいは積層扁平殻に生じる大たわみによる幾何学的非線形を考慮した非線形振動を解析し，その振動挙動を解明しました。また，柔軟構造物として，金属からなるはりや板構造を考え，炭素繊維シートを補強材として用い，部分的にFRP補強されたはりや板のモデリングと最適化手法を提案するとともに，数値計算を行い，FRP補強された柔軟構造物の最適設計法について論じました。

これらの業績は国内外の著名な学術誌に多数の研究論文として報告されています。

以上，学生の教育，学術研究の発展，本学の運営に対する貢献は，極めて大なるものがあります。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和15年12月17日
- 昭和40年 4月 北海道大学工学部講師
- 41年 4月 北海道大学工学部助教授
- 61年 4月 北海道大学工学部教授
- 平成 6年 4月 } 北海道大学工学部機械工学第二学科長
- 7年 3月 }
- 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
- 16年 3月 定年退職
- 16年 4月 北海道大学名誉教授
- 16年 4月 } 北海道工業大学総合教育研究部教授
- 21年 3月 }

(工学院・工学研究院・工学部)



かくた よしお
角田 與史雄 氏

感 想

恩師の横道英雄教授（当時）は，鉄筋コンクリート（RC）とプレストレストコンクリート（PC）の中間領域の構造として，RCにプレストレスを与える新しい構造（PRC）を提唱した。北海道開発局が建設した最初のPRC橋の設計は，当時修士課程の一年生であった私が担当した。その経験から，PRCを普及させるには精度の良いひび割れ幅の算定式が欲しいこと，および当時許容応力度設計法を採用していたコンクリート標準示方書（土木学会）を限界状態設計法に作り替えることが望ましいことを覚った。以後，それらの活動に取り組んだ。

まず，ひび割れ幅については当時理論式が存在したが，実験結果と全く合わなかった。その理論では鉄筋とコンクリートとの間の付着強度はコンクリート引張強度に比例するという仮定に基づいていたが，私は，ひび割れ間における付着強度はコンクリート強度のみでなく鉄筋径やかぶりの影響を受けることを実験的に明らかにすることにより，かぶりおよびあき（鉄筋間隔）を主要因子とするひび割れ幅算定式を提案することができた。この式はのちに土木学会がひび割れ幅算定式を導入する際に原式として採用され，実橋におけるひび割れ幅に合うように係数値が多少修正された。

限界状態設計法による示方書の改訂は，東大の岡村甫教授の主導で行われたが，私も補佐役として十分な働きができたと思う。ここでは我が国における先端的な研究成果がふんだんに採り入れられた。

以上によりPRCが普及する条件が整い，以後高速道路や鉄道橋に多くのPRC橋が建設されている。

上記で触れなかった研究としては，RCスラブの静的および疲労押抜きせん断強度の研究がある。はりのせん断強度の研究では，はりの高さによる寸法効果（せん断強度が一定にならず部材厚の影響を受ける）が知られている。それに対してスラブでは，部材厚による寸法効果のほかに，載荷面積による寸法効果もあることを明らかにし，従来の提案式に比べてはるかに精度の高い式を提案することができた。

その他，鉄筋の定着余長や新素材の応用などで成果を挙げている。

この度，思いがけず叙勲の栄に浴することになった。大学における教育・研究活動とともに，学会活動や社会活動に全力で取り組んできたことが評価されたのかと思う。すばらしい恩師の指導を受け，優秀な同僚，学生に恵まれ，また学会活動・社会活動では多くの学界，官界，業界の方々から多大な協力を得た。ここに，関係各位に心から感謝の意を表します。

功績等

角田典史雄氏は、昭和43年3月北海道大学大学院工学研究科土木工学専攻博士課程を修了し、同年4月に北海道大学工学部助教授に採用され、昭和60年4月北海道大学工学部教授に昇任、平成9年4月北海道大学大学院工学研究科教授に配置換えとなり、社会基盤工学専攻構造工学講座の教授として複合構造工学分野を担当され、平成16年3月31日限り定年により退官されるまで構造工学およびコンクリート工学の発展に尽くされました。

教育面では、学部においては、コンクリート工学、コンクリート構造学、コンクリート構造学演習、コンクリート工学実験、測量学、測量学外実習、耐震工学、弾性学、弾性・塑性学、構造工学、構造力学Ⅰ、同Ⅱなど、また大学院工学研究科においては、構造工学特論第一、同第二、同演習、同ゼミナール、構造設計特論、構造工学特別研究第一、同第二、英語特別コースでは、Design of Concrete and Hybrid Structuresなどの講義、演習を担当されるとともに、学部学生ならびに大学院学生の研究指導に当たられ、多くの技術者や研究者の育成に貢献されました。

研究面では、主に構造工学、とくにコンクリート系の構造物の材料、設計、施工、維持管理に関する分野において顕著な業績を挙げられました。同氏が提案された鉄筋コンクリート部材の曲げひび割れ幅算定式は、土木学会式の原式として知られ、また鉄筋コンクリートスラブの静的および疲労押抜きせん断耐力に関する研究は高く評価され、とくに疲労押抜きせん断耐力の研究に対しては土木学会賞吉田賞が授与されております。

同氏はまた、鉄筋コンクリートとプレストレストコンクリートの中間領域の構造体であるPRCの実用化のための研究を行い、ひび割れ幅の支配要因であるひび割れ間隔の制御に異形鉄筋の付着特性を、鉄筋ひずみの制御にプレストレスを利用する現在慣用の設計法を確立しました。その成果に基づき、PRCは橋梁をはじめ各種構造物に利用されています。

新素材である連続繊維補強材のコンクリート構造物への応用に関する研究は、他国に先駆けて制定された土木学会の設計施工指針の作成において重要な役割を果たすとともに、連続繊維補強コンクリート部材のせん断設計法の研究に対しては、日本コンクリート工学協会賞論文賞が授与されております。

以上、学生の教育、学術研究の発展、本学の運営、ならびに構造工学、コンクリート工学の分野の発展に対する貢献は極めて大なるものがあります。

略歴

生年月日 昭和16年1月30日
 昭和43年4月 北海道大学工学部助教授
 60年4月 北海道大学工学部教授
 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 13年4月 } 北海道大学工学部土木工学科長
 14年3月 }

16年3月 定年退職
 16年4月 北海道大学名誉教授
 16年4月 } ドーピー建設工業株式会社技術顧問
 25年3月 }
 16年5月 } 株式会社開発工営社技術顧問
 21年1月 }
 16年6月 株式会社シーアンドオールコンサルタント顧問（現在に至る）
 17年5月 一般社団法人北海道開発技術センター顧問（現在に至る）

（工学院・工学研究院・工学部）



てら お ひ で お
 寺尾 日出男 氏

感想

このたび、思いがけなく春の叙勲の栄誉を賜り、まことに身に余る光栄に存じます。

私は1964年北大農学部卒にて恩師常松 栄教授の勧めで、農業工学科の改組拡充で新設された農業原動機学講座の助手に採用され、担任の吉田富穂教授から教育・研究者となる多くを一からご指導を賜りました。北大在任中支えていただいた教職員の皆さん、農業原動機学講座・農用車両システム工学講座の元学生の方々へも厚く御礼を申し上げます。私は熱心な学生に恵まれ幸いでした。主な研究成果は、当時学生であった野口 伸教授（ピークルロボティクス）に負うところが大きく、共に歩んできた仲間として感謝に堪えません。

1976年に車輪式トラクタの3点ヒッチけん引に関する研究で論文博士学位を取得、任官して12年目でした。なぜ長時間を要したのかは、この課題に立ちむかう自身の基礎学力不足と課題の大きさでした。また、開設までもない新設講座で研究環境が整うまでに時間を要しました。己の論文研究が一段落して気持ちが楽になり、その後は学位論文の主査教授として学生・社会人の研究指導をし、2004年の停年退官を迎えるまでに研究室出身者の農学博士15名、論文博士4名をそれぞれ誕生させることが出来ました。貧しかった講座も農学部の学部改組で農用車両システム工学講座に改名後、科学研究費にも恵まれ、時代を先取りできる研究が行えるようになりました。

1983 - 1984年ミュンヘン工科大学へ研修留学して、西ヨーロッパ農業を背景に農業機械の先進国で輸出国であるドイツの研究動向や大学制度を学びました。この時の人脈はその後も続き、1997/2000年の2度札幌で農用バスシステムLBSに関する国際シンポジウムを開催しました。このLBS通信規格はやがて国際標準規格ISO-BUSへ統合され、GPSの普及と相まって圃場で使用される農業機械の制御技術に利用されています。2003年これまで蓄積した成果を披露するため、研究室全員5名がミュンヘン工大とドレスデン工大を訪問した研究室レベルの交流セミナーは、他流試

合の出稽古でもあり、刺激のあるよい思い出となりました。

最後になりましたが、2002年北大病院循環器外科医師の上久保康弘先生（市立釧路総合病院・心臓血管外科・統括診療部長）のもとバイパス3本手術のお陰で、今日までの19年間を生きて80才となり、受賞に至りました。ここに改めて心から御礼を申し上げます。

北海道大学は知の拠点として北海道の発展にとって不可欠です。ますます教育研究の場が充実されますよう願ってやみません。

功績等

寺尾日出男氏は、昭和39年3月北海道大学農学部農業工学科を卒業後、同39年4月北海道大学農学部助手に採用され、同61年4月同教授に昇任され、農業工学科農業原動機学講座を担当（担任）、平成4年4月学部改組により農業工学科農用車両システム工学講座を担当され、同11年4月大学院重点化（改組）により生物資源生産学専攻生物生産工学講座に配置換となり、同16年3月定年により退官されました。

この間、同氏は、二軸4輪トラクタ用作業機でも、その取り扱いが比較的難事とされた直装式プラウを被けん引対象機種として選び、合理的な3点ヒッチ機構の設計・製作ならびにその取扱い上、トラクタのけん引性能向上に対して考慮すべき資料を得ることを目的に研究を進められました。また、農業機械のダイナミクスに関する研究、石油代替燃料の熱エネルギー変換法、車両系農業機械のロボット化、精密農業のセンシングテクノロジーの分野の発展に貢献されました。そして、平成9年にオフロード車両をロボット化するための基礎理論に対して日本機械学会ROBOMECH賞、平成13年には汎用ロボットトラクタの開発に対し日本機械学会北海道支部研究技術賞を受賞されました。

学内においては、点検評価委員会教育活動専門委員会委員、図書館委員会委員、高等機能総合開発センター予算・施設委員会委員、点検評価委員会大学院教育専門委員会委員、入学者選抜制度調査委員会委員などを務められるとともに、学部内の概算要求推進のためのWG会議委員や農業工学科長、生物生産工学講座主任、生物資源生産学専攻長を務められ、学部・研究科の発展に尽力されました。

学外においては、日本学術会議農業機械研究連絡委員会委員、生物系特定産業技術研究推進機構基礎的研究業務に係る中間評価専門委員を歴任されました。また、公益社団法人札幌同窓会理事、公益社団法人札幌農学振興会理事、一般社団法人札幌農学同窓会理事を務められました。

学会活動として農業機械学会評議員、同理事、同北海道支部長、農業機械学会賞受賞者選考委員会委員、日本農業工学会国際会員代議員を務められ、わが国における学術の発展に大きく貢献されました。

以上のように、同氏は40年の永年にわたり北海道大学において教育者、研究者として優れた業績を挙げ、本学における研究・管理運営に尽力するとともに、わが国における

学術研究の発展、後進の啓発および斯界の発展に貢献をしたもので、その功績は誠に顕著であります。

略歴

生年月日	昭和15年11月14日
昭和39年4月	北海道大学農学部助手
45年10月	北海道大学農学部講師
53年1月	北海道大学農学部助教授
61年4月	北海道大学農学部教授
平成8年4月	北海道大学農学部農業工学科長
16年3月	定年退職
16年4月	北海道大学名誉教授

（大学院農学研究院）



あらや **新谷** とおる **融** 氏

感想

この度、令和3年春の叙勲（瑞宝中授章）の栄に浴し、身に余る光栄と恐縮しております。これもひとえに、諸先輩各位の御指導によるものと感謝しております。

私は1959年4月の北海道大学入学で、幼少期を過ごした石狩川上流上川盆地の旭川市を離れ、道都札幌に移住することになりました。私の北海道原風景は、実家裏から望む大雪山連峰から流れ下る石狩川と、旭川市街地と田園地帯をつなぐ旭橋、そして豪雨の度に暴れ狂って氾濫・破堤・木橋崩落を繰り返した河川氾濫原（ヤナギ河畔林）でした。

大学2年目に訪れた学部専門選択の時、国土保全・治山治水・防災緑化などのキーワードに導かれ、農学部林学科砂防学を専攻することになりました。以降昭和40年助手任官から平成16年停年退職までの約40年間を農学部キャンパスで過ごすことになりました。

砂防学は、かつては上流山地で多発する山崩れ・地すべり・土石流などの山地災害を対象とした防災技術学と云われていたため、石狩川・沙流川などの豪雨災害と十勝岳・樽前山・有珠山など火山性山地河川の土砂災害を主な研究対象としていました。そして工学部河川工学グループとの共同で、森林河川流域の動態解析の研究が産まれました。また、理学部火山地質学グループとの共同で、1977・78の有珠山大噴火・泥石流災害から火山防災研究が始まりました。

しかし、2000年再度の噴火泥石流災害を受けた火山山麓の地元行政と地域住民から、被災地の早期復旧・復興まちづくりのために、防災機関のみならず防災専門学の連携を求める声が強まってきました。

自然災害被災者住民の声からNPO法人環境防災研究機構が平成16年に産まれました。私も北大退官を機に、学部学生・院生教育を離れ、当機構の一員として、これまで学ん

できた防災学の社会還元を図るべく、地域社会防災教育に微力をつくす所存です。

今回の叙勲に際しましては、私を教え導いて頂いた大学の諸先輩・後輩各位ならびに、防災行政・技術について多くを教えて頂いた国・道・民間の防災関係各位そして、危険域に生きる人々の防災への願いを伝えて頂いた地域住民各位に厚く御礼申し上げます。また全国から集結し強い情熱を持ち込んでくれた学生・院生達及び教育研究を補佐頂いた職員各位にも感謝申し上げます。

功績等

新谷融氏は、昭和40年3月北海道大学大学院農学研究科林学専攻修士課程を修了後、同研究科林学専攻博士課程を中途退学し、同年8月北海道大学農学部助手に採用され、平成元年4月同教授に昇任されました。平成9年4月に大学院重点化により環境資源学専攻森林管理保全学講座に配置換となり、また同11年4月から同14年3月まで北海道大学評議員を併任され、同16年3月定年により退官されました。

同氏は、河床堆積物上に成立する樹木年輪情報を解析し、火山性荒廃溪流における土石移動の時系列解析手法の開発、ならびに河床洗掘と堆積が時間的にも空間的にも交互に発生する現象を明らかにしました。また、活火山有珠山における二度にわたる噴火、ならびに十勝岳小噴火など、火山噴火とその後の泥流対策などに携わり、活火山砂防におけるハザードマップの作成、新砂防技術の適用、適切な防災計画の立案・施設配置について、多くの知見を発表されました。十勝岳では年輪情報のみならず、山腹斜面に残されている火山降下物テフラの年代解析を実施し、大正泥流の攪乱範囲のみならず、それ以前の泥流発生履歴と分布範囲を明らかにし、ハザードマップ作成に寄与されました。さらに、有珠山で初めて使用されたスリットダムの効果を検証し、流出土石の飾分け作用についての定量解析結果を日本で初めて発表されました。

学内においては、総長補佐、北海道大学評議員を務められ、施設計画委員会・キャンパスマスタープラン委員会基幹環境部会委員として、全学的な土地利用計画と農学研究との調和に貢献されました。また、総合博物館運営委員会委員並びに北方生物圏フィールド科学センター運営委員として、全学的な利用と貢献を果たすべく、博物館並びにセンターの創設に尽力されました。

学外においては、文部省学術審議会専門委員、文部省国立大学における農場・演習林等の在り方に関する調査研究協力者会議・協力者、中央防災会議専門委員、日本学術会議森林工学研究連絡委員会委員、また、地方においては北海道防災会議専門委員、北海道環境影響評価審査会委員、北海道河川委員会委員、北海道森林審議会会長などを歴任され、北海道ならびに全国の火山防災、森林計画、河川整備計画に貢献されました。

また学会活動として、日本緑化工学会評議員、日本林学会評議員などを歴任した後、砂防学会会長を務められ、北

海道ならびに日本の砂防学、林学研究の発展に大きく寄与されました。

上記の功績などにより、平成18年に赤木賞（赤木正雄顕彰事業・全国治水砂防協会）、同21年に防災功労者表彰防災担当大臣表彰（国務・内閣府防災担当大臣）、同26年に治山事業100周年記念治山功労者表彰林野庁長官賞（日本治山治水協会）を受賞されました。

以上のように、同氏は40年の永年にわたり北海道大学において教育者、研究者として優れた業績を挙げ、学術研究の発展、後進の啓発及び斯界の発展に尽くすとともに、大学及び学部の管理運営に多大な貢献をしたもので、その功績は極めて顕著であります。

略歴

生年月日	昭和16年3月26日
昭和40年8月	北海道大学農学部助手
47年3月	北海道大学農学部講師
50年4月	北海道大学農学部助教授
平成元年4月	北海道大学農学部教授
9年11月	北海道大学総長補佐
11年4月	北海道大学評議員
16年3月	定年退職
16年4月	北海道大学名誉教授

(大学院農学研究院)



みやもと のほる
宮本 登 氏

感想

この度、叙勲の栄に浴し光栄に存じます。ご高配を賜った方々にお礼申し上げます。

私が大学での研究・教育に就く際にご指導賜った元北大工学部機械工学科教授 深沢正一先生、村山 正先生、元室工大機械工学科教授 宮本 武先生に感謝申し上げます。研究遂行に際しご協力戴いた北大工学部機械工学科元教授 近久武美先生、工学部機械工学科教授 小川英之先生、元熱機関第二研究室や元熱システム研究室助手の山崎信行先生、城戸章宏先生、技官の山崎賢治先生、学部や大学院に当時在学していた学生諸氏にお礼申し上げます。

在任中の内燃機関研究は、以下の3点に大別できます。

1. 内燃機関の燃焼現象究明と、熱効率やエミッション等の性能改善。
2. 石炭液化油、含酸素燃料、天然ガス、水素等の石油代替や再生可能燃料での燃焼・性能解明。
3. 燃焼・性能シミュレーションにおける数学モデル構築。

燃焼は瞬間爆発現象として捉えられがちですが、熱発生

の時間推移又は燃焼率形状は性能に対し著しい影響を及ぼします。そのため、燃焼率は性能に対しその形が理想上どうあるべきかを模索しました。燃焼率の理想形状により、燃焼騒音やNOx濃度等の諸性能を同時改善し得る可能性を先駆的に提示しました。国内外の研究機関は、燃焼率の理想形状の実現を目的に技術開発を試み、パイロット噴射、燃料噴射弁の小口径化や高圧多段噴射、EGR等の技術開発を行い今日の高効率超低エミッション化に至りました。高圧多段噴射は、排ガス後処理への対応にも繋がりました。

内燃機関は、北大工学部創設時から重要な研究対象で、自動車、航空機、船舶、発電機等の動力源として期待や課題も多く研究が不可欠でした。内燃機関の全盛期において燃焼研究に深く携わり、技術発展に貢献できたことを幸せに思います。

内燃機関の研究は、機械工学に限らず、理工学全域、時に農学や経済学等の広い視点が求められます。熱効率等の性能が向上しても、燃料の価格、生産量や分配等が確保されなければ存在意義も揺らぐため、再生可能燃料を含む燃料の生産、精製や輸送等に関わる多彩な観点で研究推進が求められ、国内外を問わずグローバルな視点に立った研究体制の確立に努力しました。燃料問題は国や社会の基盤であり、将来燃料や利用指針の提示も重要で、以下の3点で活動しました。

1. 動向調査では、国際視察団を組織し、各国の燃料事情や技術調査。
2. 人的交流では、海外の研究者も広く受入れ、共同研究の強化と関係構築。
3. 研究体制では、米国MITが試行する工学科学ESの理念の下、その有効性実証。

現在のグローバル化の潮流に先駆けて、国内外の多くの研究者と強いネットワークを構築してきたことは、生涯の財産になりました。

この叙勲は身に余る光栄で、在任中お世話になった皆様に改めて感謝申し上げると共に、充実した学究生活を送らせて戴いた北海道大学が今後、益々発展されることを心から祈念申し上げます。

功績等

宮本 登氏は、昭和39年3月室蘭工業大学機械工学科を卒業され、同年4月から三菱重工業株式会社に3年間勤務した後、昭和42年4月北海道大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程に進学、昭和44年3月同課程を修了され、同年4月同専攻博士課程に進学、昭和47年3月同課程を修了され、同年47年4月北見工業大学機械工学科講師に採用、同年10月同助教授に昇任し、昭和49年4月北海道大学工学部機械工学科助教授に採用され、昭和61年4月には教授に昇任、平成9年4月北海道大学大学院工学研究科教授に配置換になりました。平成16年3月31日限り定年により退官されるまで、熱機関学の分野の発展に尽力されました。

教育面では、学部においては熱システム工学、内燃機関工学、内燃機関制御工学、機械工学概論、機械工学大意第

一、音響工学、設計演習、機械工学実験など、また、大学院工学研究科では熱システム制御学特論、内燃機関工学特論、熱エネルギー工学特別演習、熱エネルギー工学特別研究第一、熱エネルギー工学特別研究第二、機械工学特別研究第一、機械工学特別研究第二、機械工学特論ゼミナールなどの講義、演習を担当されると共に、学部学生ならびに大学院生の研究指導に当たられ、数多くの技術者および研究・教育者を育成されました。

研究面では、熱機関とりわけ内燃機関におけるエネルギー・環境問題に取り組み数多くの業績を挙げられ、学術・技術の発展に貢献されました。

内燃機関の燃焼に関して、シミュレーションを基に熱効率、排出NOx、燃焼騒音等を同時に改善するための燃焼率形状および当量比時系列推移の目指すべき方向を提唱すると共に、圧縮着火機関においては燃料供給・燃焼系を軸とした各種燃焼制御法の研究とレーザ等による高速燃焼現象の解析と評価を、火花点火機関では燃料の直接噴射方式を含む層状混合気形成と燃焼制御の研究をそれぞれ系統的に行い、高速燃焼制御技術の発展に多大な貢献をされました。

大気汚染物質に関する研究では、高温・高圧燃焼における炭素微粒子、PAHも含めた可溶性有機物質、NOx、未燃炭化水素などの生成機構とそれらの低減に関わる業績があり、その結果は熱機関を含む燃焼機器における大気汚染防止技術の発展に大きく寄与しました。

これらの研究により、国内外の学会また大学において招待講演の講師として招かれると共に、多くの賞を受賞されています。

以上、学生の教育、学術研究の発展、本学の運営並びに産業界、地域社会に対する貢献は極めて大なるものがあります。

略 歴

生年月日	昭和16年1月7日
昭和39年4月	三菱重工業株式会社
42年3月	
47年4月	北見工業大学講師
47年6月	北見工業大学工学部講師
47年10月	北見工業大学工学部助教授
49年4月	北海道大学工学部助教授
61年4月	北海道大学工学部教授
平成9年4月	北海道大学大学院工学研究科教授
16年3月	定年退職
16年4月	北海道大学名誉教授

(工学院・工学研究院・工学部)

One Healthリサーチセンターを共同プロジェクト拠点として認定

本学では、学内組織にとらわれず、社会のニーズに沿って、高度な教育プログラムの開発や複数の学問分野にまたがった優れた教育や研究を行うプロジェクトのうち、本学の教育研究の充実に特に資すると認められるものを、「共同プロジェクト拠点」として認定しています。拠点として認定することにより、活動が学外からも見えやすくなり、教育研究活動が更に発展することが期待されます。

新たに、3月1日(月)付けで、One

Healthリサーチセンターが共同プロジェクト拠点として認定されました。One Healthは「人と動物の健康と共生・地球上の健康」を示す概念として人獣共通感染症の制圧のきっかけとなったもので、この概念はさらに進化し、人と動物を取り巻く環境の健康(保全医学)、あるいは「人と動物の病気の共通性から、医学・獣医学の連携は双方の健康の向上に繋がる」とするZoobiquity(汎動物学)の観点から、医学、獣医学、感染症学、環境化

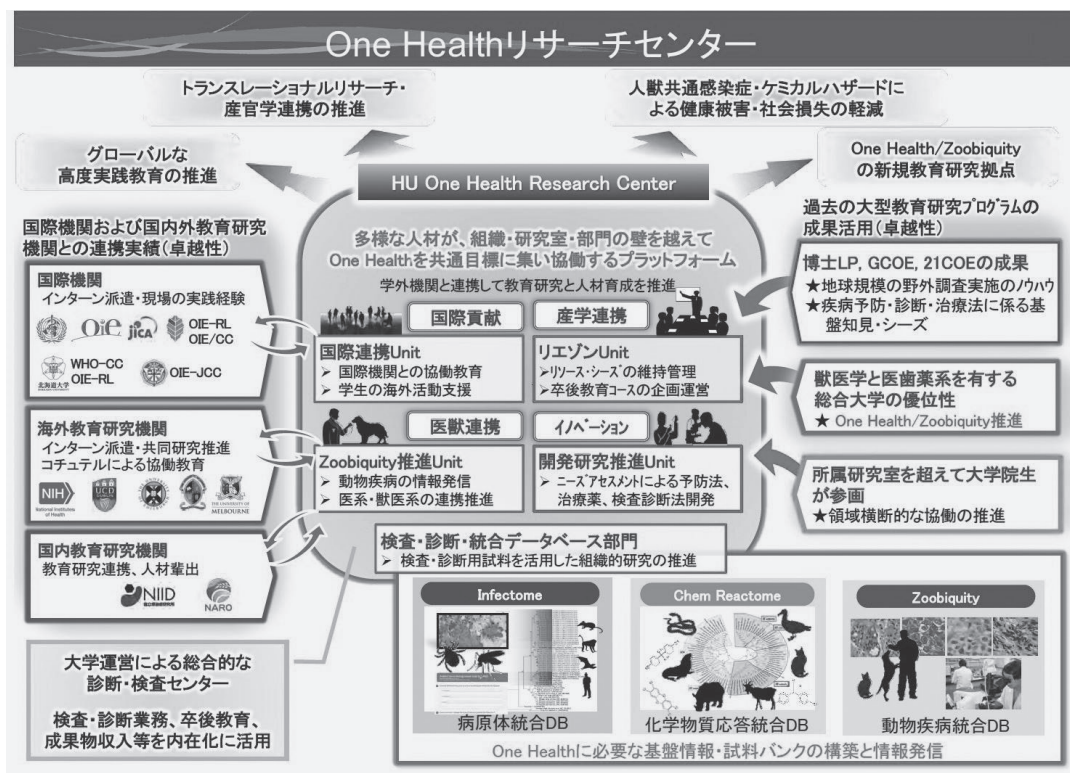
学等の一層の連携が求められています。

このOne Healthを共通目標に、多様な人材が組織の壁を越えてこの拠点に集い、目的に応じて機動的にユニットを構築して、ミッションが明確な研究プロジェクトや国際的な教育研究活動、さらに実践的教育活動を進めます。

なお、本学が現在認定している共同プロジェクト拠点は以下のとおりです。

(総務企画部企画課)

プロジェクト拠点名称	拠点代表者名	認定期間	テーマ
知識メディア・ラボラトリー	情報科学研究院 有村 博紀	H29.4～ R4.3	高度知識情報基盤技術の研究開発
情報法政策学研究センター	法学研究科 中山 一郎	H30.4～ R5.3	情報法政策学研究
産学融合ライフイノベーションセンター	薬学研究院 前仲 勝実	H31.4～ R4.3	連続的に医薬品候補を創出する創薬拠点形成
量子トポロジー理工学教育研究センター	工学研究院 丹田 聡	R2.4～ R7.3	トポロジー理工学
One Healthリサーチセンター (今回認定されたもの)	人獣共通感染症 国際共同研究所 澤 洋文	R3.3～ R7.3	多様な人材が、組織・研究室・部門の壁を越えてOne Healthを共通目標に集い協働するプラットフォームの構築



One Healthリサーチセンターの概要

「北海道・札幌マラソンフェスティバル 2021」ランナーが キャンパスを疾走

「北海道・札幌マラソンフェスティバル2021」が5月5日（水）に開催され、ハーフマラソンと10kmマラソンのランナー、男女約100人が本学札幌キャンパスを駆け抜けました。

ランナーたちは、レース終盤（ハーフマラソン：19km付近）に本学構内に入り、メインストリートを縦断。ク

ラーク像を右手に眺めつつ中央ローンを通り、札幌農学校時代の正門を移設した南門からゴール（ハーフマラソン：北7条西5・6丁目）を目指しラストスパートをかけて行きました。

本大会は、8月に札幌市で開催される東京2020オリンピックのマラソン競技テストイベントを兼ねており、新型

コロナウイルス感染症対策として、沿道での観戦自粛が呼びかけられる中で開催となりました。

なお、マラソンの様子は、STV（札幌テレビ放送）で生中継されました。

（総務企画部広報課）



ハーフマラソン20km地点



中央ローン横を駆け抜ける選手達



男子優勝のヒラリー・キブコエチ選手



女子優勝の一山麻緒選手

「記者懇談会」を開催

4月28日（水）、百年記念会館において、総長と地元記者との交流を深めることを目的とした「記者懇談会」を開催しました。本学から寶金清博総長及び吉見 宏理事・副学長（広報室長）が出席、北海道教育庁記者クラブ加盟社から6名の参加がありました。

冒頭、寶金総長から、主に学生支援

やオンライン授業等の新型コロナウイルスに対する本学の取り組みや、地域連携について話題提供があり、その後、記者の方々との懇談を行いました。

記者からは、新型コロナウイルス感染症流行による学生や研究活動への影響に関する質問のほか、SDGsに関する取組等、様々な質問があり、闊達な

雰囲気での懇談が進みました。

寶金総長からは「本学は歴史的にもSDGsに非常に強い大学であるので、指導的な大学を目指していきたい」旨の発言がありました。

（総務企画部広報課）



記者懇談会の様子



記者からの質問に答える寶金総長



記者からの質問に答える吉見理事・副学長

第1回 定例記者会見を開催

4月22日（木）、百年記念会館において、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けてわかりやすく発信することを目的とした「定例記

者会見」を開催しました。吉見 宏理事・副学長（広報室長）の進行のもと、人獣共通感染症国際共同研究所から鈴木定彦所長、佐々木道仁講師、佐藤彰

彦客員教授、薬学研究院から前仲勝実教授が発表し、北海道教育庁記者クラブ加盟社から10名の参加がありました。発表・報告内容は以下の通りです。

発表事項（発表者）

- ・人獣共通感染症国際共同研究所について
（人獣共通感染症国際共同研究所長 鈴木 定彦）
- ・人獣共通感染症国際共同研究所における新型コロナウイルス感染症の基礎研究について
（人獣共通感染症国際共同研究所 講師 佐々木 道仁）
- ・化合物のスクリーニングについて
（人獣共通感染症国際共同研究所 客員教授 佐藤 彰彦）
- ・BSL3クライオ電子顕微鏡 国際連携へ
（薬学研究院 教授 前仲 勝実）

報告事項（報告者）

- ・北海道大学ビジュアルイメージの制定について
（理事・副学長 吉見 宏）



定例記者会見の様子



吉見理事・副学長の挨拶



当日の発表者（左から佐々木講師、鈴木所長、前仲教授、佐藤客員教授）



会見後の追加取材の様子

広報課では定例会見発表者を募集しています。各組織の研究プロジェクトや研究者の研究内容紹介を主とします

が、教育活動や地域連携に関する取組等、研究関連以外でもこの場を活用して発表することが可能です。

発表希望がある場合は、各部局の庶務担当にご連絡願います。

（総務企画部広報課）

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をする事としています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報 基金累計額（4月30日現在）

29,558件 5,482,246,363円

4月のご寄附状況

法人等16社、個人198名の方々から42,009,778円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社FC Operations、株式会社エルムプロジェクト、国土防災技術株式会社、医療法人社団 こみや矯正歯科、一般財団法人砂防・地すべり技術センター、センチュリーロイヤルホテル、株式会社東京設計事務所、日本甜菜製糖株式会社、株式会社ニトリホールディングス、日本中央競馬会、ネットヨタ札幌株式会社、公益社団法人 函館市医師会、株式会社プランニング・ホッコー、前澤工業株式会社

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青木 俊介	安達 三朗	飯野 隆之	池田 英雄	池田 慎	石井 哲夫	石井 仁
稲澤たか子	乾 賢	井上 歌子	猪股 路子	井原 博	入澤 秀次	江川 順一	榎 大介
縁記 和也	遠藤 禎一	大川 聡	太田 雅博	大塚 義紀	大畑 昇	大原 正範	奥田 英信
長田 淳	尾嶋 孝一	小田原一史	片桐 一	片桐 康雄	加藤 紘之	加藤 誠	金川 眞行
上小倉しのぶ	川口 政史	河本 充司	菊池 正仁	木崎甲子郎	北山 正二	衣川 暢子	木村 郁夫
木村 孔一	工藤 寛	久保田一志	河野 一郎	木幡 周一	小林 賢人	小林 清一	小林 みほ
齊藤 晋	斉藤 久	坂下 憲治	坂本 大介	桜井 照久	酒匂理久夫	佐藤 哲憲	澤邊 順子
三升畑元基	塩野 俊和	志済 聡子	柴田 和彦	清水 麻由	菅原 新也	杉江 和男	杉本 千尋
鈴木 潤一	鈴木 貴之	鈴木 徳行	鈴木 正司	諏訪 恭一	関 裕	瀬戸 俊樹	瀬名波栄潤
泉水 澄	高木 房吉	高橋 幸夫	竹内 義治	田中 暉義	種井 善一	田原 稔	津田 直輝
土家 琢磨	土屋 裕	出口 達也	寺澤 睦	土井 紘	戸田 純子	豊田 威信	直井 隆徳
永井 信夫	中川 洋	中塚 英俊	中山 和雄	西田 実弘	野呂 幸治	芳賀 卓	橋場 孝
花田 秀一	浜田 薫	樋浦 順	福士 幸治	福永 悟郎	細川 宏	前田 博	町田 大祐
町田 貴裕	松井 佳彦	松田 健一	松原 謙一	松本伊智朗	松元 和幸	真部 淳	三上 洋
三谷 千花	宮家 康浩	宮崎 慶介	宮田 信幸	三好 敬久	村上 泰一	村上 幸夫	村守 清
矢嶋 剛	安陵 智代	柳瀬 義和	山口 淳二	山口理喜三	山田 家正	八代田俊平	横山 考
吉岡 正俊	吉田 広志	鷲谷 公人					

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

株式会社FC Operations, 株式会社東京設計事務所, 日本中央競馬会

（個人）

木幡 周一, 杉本 千尋, 種井 善一, 三上 洋, 三好 敬久

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスして下さい。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（学内電話 2017）
--

北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー称号授与式を挙

4月27日（火）、北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー称号授与式を執り行い、関係者列席の下、今年度新たにディスティングイッシュトプロフェッサーの称号を付与された者（野口 伸教授）に対し、寶金清博総長から記念楯が授与されました。

北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー制度は「北海道大学創基150年に向けた近未来戦略」の策定を機に、教育研究の一層の推進に資することを目的として、平成26年度に創設したものです。人格が高潔で、世界水準の優れた研究業績を有し、今後

更なる研究の進展が見込まれるとともに、本学の名譽を著しく高めることが期待できる本学の教員等へ称号を付与します。

なお、今年度の被称号付与者は、以下のとおりです。

（総務企画部人事課）



授与式後の記念撮影（左から山口淳二理事・副学長、野口教授、寶金総長）

所 属	職名	氏 名	称号付与期間
理学研究院	教授	塚本 尚義	令和3年4月1日～令和5年3月31日 ※付与期間更新
農学研究院	教授	野口 伸	令和3年4月1日～令和6年3月31日
化学反応創成研究拠点 (ICReDD) 及び 先端生命科学研究院	教授	ゲン 劍萍	令和3年4月1日～令和6年3月31日 ※付与期間更新
医学研究院	教授	白土 博樹	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
低温科学研究所	教授	渡部 直樹	令和3年4月1日～令和6年3月31日 ※付与期間更新
環境健康科学研究 教育センター	招へい教員	岸 玲子	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
先端生命科学研究院	招へい教員	コスタンティノ クレトン	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
先端生命科学研究院	招へい教員	マイケル ルビンスタイン	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
人獣共通感染症 国際共同研究所	招へい教員	ロレーナ エリザベス ブラウン	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
人獣共通感染症 国際共同研究所	招へい教員	ウィリアム ウォームスリー ホール	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
人獣共通感染症 国際共同研究所	招へい教員	エリザベス ルーズ ハートランド	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
人獣共通感染症 国際共同研究所	招へい教員	デイビット チャールズ ジャクソン	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新
人獣共通感染症 国際共同研究所	招へい教員	アーナブ ペイン	令和3年4月1日～令和4年3月31日 ※付与期間更新

「北海道大学レーン記念賞」に寄附

3月17日（水）付けで、“The Janet L. Davila Trust”より、「北海道大学レーン記念賞」に対し、75,579円（700米ドル）のご寄附をいただきました。

“The Janet L. Davila Trust”は、北海道大学レーン記念賞の名称の由来であるハロルド・レーン先生のご息女ジャネット・ダビラ氏が創設した遺産管理団体です。本学は、同団体から2019年にも1,632,784円（15,200米ドル）のご寄附をいただいております。ご寄附の総

額は1,708,363円（15,900米ドル）となりました。

本学レーン記念賞は、戦前から戦後にかけて本学の英語教育にご尽力されたハロルド・レーン先生の功績を記念し、学部1、2年次生で英語の成績が優秀かつレーン先生の残した国際親善の精神にふさわしい学生に対し、賞状と記念メダル・記念品を毎年贈呈しているものです。

同先生のご遺族と本学との間には、

長く深い交流が続いており、この度のご寄附にあたっては、ご遺族の皆様が本学へ深い敬意をお持ちである旨のメッセージをいただいております。本学の附属図書館には同先生のご功績を記念し、「レーン文庫」を設置していますので、皆様是非足を運んでみてください。

（学務部学生支援課）



記念メダル

寶金総長が清華大学110周年記念式典・世界大学学長フォーラムにオンライン出席

4月21日（水）、寶金清博総長が中国・北京市で行われた清華大学110周年記念式典・世界大学学長フォーラムにオンライン出席しました。

清華大学は、名実ともに中国を代表する総合大学であり、現在は約50,000人の学生が在籍しています。英国タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）の2021年度世界大学ランキングでは20位にランクされるなどアジアのみならず世界のトップに位置する大学です。本学は2008年に学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書を締結して以降、清華大学と継続的に教育研究交流を推進しています。

世界大学学長フォーラムは、4月19日から24日まで計5日間に渡って開催され、日本から参加した本学、名古屋大学、東北大学、東京大学など11校に加え、北京大学、オックスフォード大学、イェール大学をはじめとする、各国150機関以上の代表が出席しました。寶金総長は2日目に「Global Carbon Neutrality: Universities Responsibility and Action（世界的炭素中立：大学の責任と行動）」をテーマとしたセッションに出席し、本学のSDGsに関する取組の歴史や、サステナブルキャンパス実現のための仕組み作り、炭素排出ゼロを目指すフィールド研究の事例、本

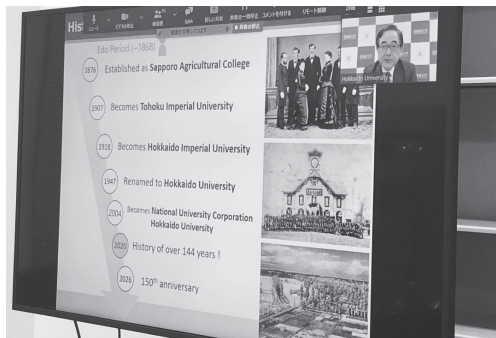
学が加盟する気候変動をテーマとした国際コンソーシアムの活動などを紹介しました。これらを通し、キャンパスからフィールド研究、国際連携へと展開する本学の特徴ある取組と、グローバルな大学の使命について力強いメッセージを発信することができました。

今回は国際的な情勢により、渡航が叶わずオンラインでの出席となりましたが、清華大学をはじめとする各国の大学代表者と顔を合わせる貴重な機会となり、今後も良好な国際関係を継続していくことが期待されます。

（国際部国際連携課）



オンラインでスピーチする寶金総長



発表中の様子



セレモニーの様子（清華大学ホームページより）

サブサハラ・アフリカ向けの「大学検索データ・ポータル」の開設

国際連携機構アフリカサカオフィスでは、文部科学省委託事業「日本留学海外拠点連携推進事業：サブサハラ・アフリカ地域」の拠点として、当該地域から優秀な留学生の誘致を行っています。その活動の一環として、留学情報の効率的な情報提供のための「大学検索データ・ポータル」を開設しました。本ポータルには、本学をはじめ、国内67大学・教育機関で提供されている700を超えるコース情報が掲載されており、留学希望者が課程、分野及び本邦の大学名など様々な項目から検索を行うことができます。

英名：Study in Japan for Africa
University Search Data Portal
URL：https://studyin-japan-africa-portal.com

オンラインを活用した情報提供を行う機会がますます増えるなか、各大学への応募時期、応募方法が一元化されたこのようなデータ・ポータルは、留学希望者にとって日本留学がより身近になるツールとなることが期待されます。特に、本「大学検索データ・ポータル」には、短期留学の希望者を対象に、日本への交換留学が可能である大学間協定を締結している本邦大学の情報も盛り込まれています。このように、本ポータルは同地域に特化した唯一の日本留学のためのデータ・ポータルとなっています。

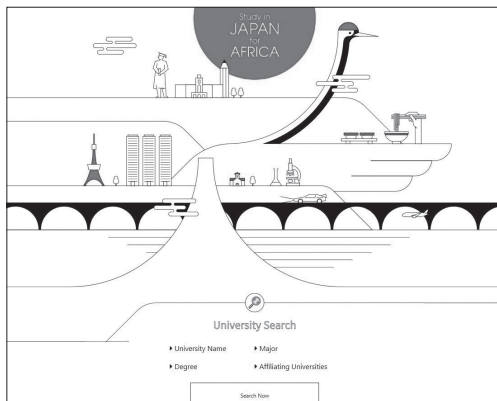
また、本ポータルは、サブサハラ・アフリカからのアクセスの多くがスマートフォンであることに配慮した構成で、少ないデータ容量でアクセスでき

るようデザインにも工夫をこらしました。開設後、南アフリカの主要ニュース・メディアを管轄するIndependent Media社（www.iol.co.za）において、本ポータルが紹介されています。（掲載記事<https://bit.ly/3gCEjoE>）

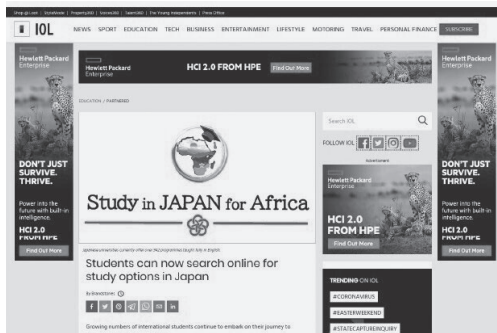
学内で留学生受け入れ促進をお考えの際には、是非、本ポータルを活用した情報発信をご検討ください。

今後も、アフリカサカオフィスに配置されている留学コーディネーターは、留学希望者のニーズに沿って、より効果的・効率的な大学選びや応募に向けた個別支援を行います。

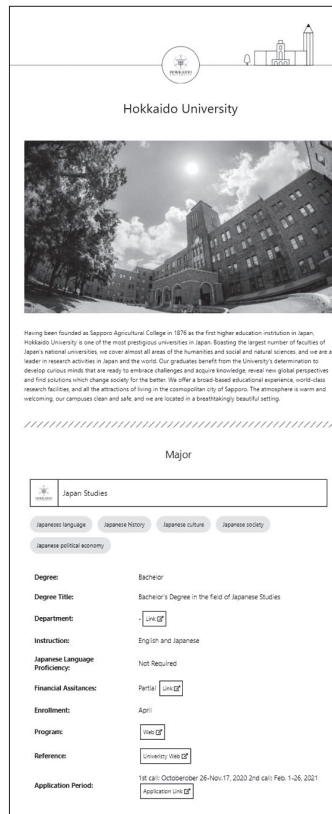
（国際部国際連携課）



データ・ポータルのトップ画面



南アフリカにおける掲載記事
(Independent Media社のスクリーンショット)



データ・ポータル検索結果の例：日本で検索した際に表示される本学の現代日本学プログラム

■ 部局ニュース

「南極学術探検隊樺太犬訓練所」(稚内)の写真画像を大学文書館で受贈

4月5日(月)、本学職員を介して、安藤久男氏から稚内市に設置された「南極学術探検隊樺太犬訓練所」に関する写真画像64点(1956年撮影)を大学文書館にご寄贈いただきました。

1956(昭和31)年初頭、第一次南極地域観測隊の西堀栄三郎京都大学教授から、南極観測に使用する犬ソリの準備のため、カラフト犬の訓練とソリの製作などの協力を求められ、「北海道大学極地研究グループ」が発足しました。同グループには、犬飼哲夫農学部教授(動物学)、楠宏低温科学研究所助教授(海洋学)、木崎甲子郎理学部助手(地質学)や本学山岳部員が加わりました。安藤氏は山岳部に所属する

理学部学生(1953年入学)として参加しました。

観測隊と極地研究グループは、「樺太犬訓練所」を稚内公園内の丘陵地に設置し、安藤氏ら若手がカラフト犬約40頭の訓練にあたりました。極寒と厳しい風雪の極地を想定した条件における生活の経験、ソリを牽いて走る訓練、チームワークの養成などです。受贈資料からはこうした訓練の様子がよく分かります。

1956年11月、訓練を受けたカラフト犬の内22頭が第一次南極地域観測隊と共に南極へ出発しました。観測隊の帰国に際しては悪天候等の理由から、カラフト犬は取り残され多くが犠牲とな

りました。この内、タロとジロの2頭が生存していたエピソードは有名です。

タロはその後、帰国を果たし、晩年を本学農学部附属植物園で過ごしました。現在、植物園はタロの剥製を保存しています。

また、安藤久男氏は1968~1970年の第10次南極地域観測隊の越冬隊メンバーとして南極に足を踏み入れています。

ご寄贈いただいた資料は、大学文書館で大切に保存し、利用に供して参ります。

(大学文書館)



安藤久男氏と、左からタロ、ジロ、サブロ



野外雪中生活を想定した片屋根式犬小屋



製作した犬ソリ



カラフト犬にソリを牽かせる訓練

サッカー部関係資料を大学文書館で受贈

4月5日(月)・8日(木)・13日(火)・20日(火), 岸豊氏(サッカー部OB会会長)より, サッカー部の沿革に関する資料79点を大学文書館にご寄贈いただきました。

受贈した資料は, (1)『部報』67点(原本60点, 複製版7点), (2)練習日誌2点, (3)OB会「北大サッカークラブ」の写真集5点, (4)『北海道大学サッカー部80年史』や追悼文集などの刊行物5点です。

(1)『部報』は, 旧制大学期の発行が6点(1932, 1934~1937, 1940年), 新制大学期の発行が61点(1952, 1958, 1959, 1962~2020年)揃っています。毎年度の戦績や活動報告のほか, 随想や回想が綴られています。

サッカー部は, 1922年に発足した「アルゴン蹴球倶楽部」を前身とし, 1923(大正12)年に「北海道帝国大学文武会蹴球部」として認可されました。1932(昭和7)年発行の『部報』には, 創部当時, 丸太4本と農場で借りた鋤鍬を試合会場の中島公園まで運び, ゴールを設置した様子が記されています。

1962~1964年発行の『部報』からは, 教養部などの新校舎建設のためにグラウンドが大学構内を転々とし, 地面の状態の悪い中で工夫しながら練習や試合にあたった様子がうかがえます。

(2)練習日誌は1959年の練習メニュー, 出欠表, 合宿スケジュール, 試合内容を筆記したノート2冊です。

(3)OB会「北大サッカークラブ」の写真集(2014~2017, 2019年)には, 各大学OBとの試合, 本学グラウンドの整備など, 各年度の活動を記録した写真が収録されています。OB会は, グラウンドの改修工事への協力など, その整備に長年尽力されており, 将来的にはグラウンドを人工芝生に更新することも検討されています。

2023(令和5)年, サッカー部は創部100周年を迎えます。今後, ご寄贈いただいた資料は, 部の歩みを示す歴史資料として大学文書館において大切に保管し, 展示や閲覧利用などを通じて広く紹介して参ります。

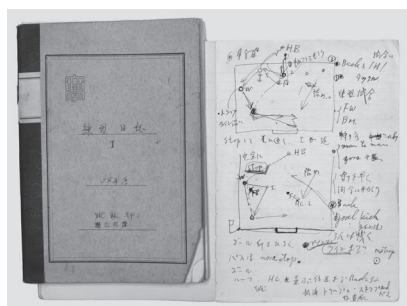
(大学文書館)



旧制大学期の部報 (1934, 1935年)



新制大学期の部報 (1964~1966年)



練習日誌 (1959年)



OB会の写真集 (2014~2017, 2019年)

工学研究院・情報科学研究院・化学反応創成研究拠点 (WPI-ICReDD) 合同シンポジウムを開催

化学反応創成研究拠点 (ICReDD/アイトレッド) では、昨年12月に開催した理学部との合同シンポジウムに続き、工学研究院・情報科学研究院との合同シンポジウムを4月26日(月)にオンライン形式により開催しました。本シンポジウムは、化学反応創成研究拠点と工学研究院、情報科学研究院の最新の研究動向を介して、研究者間の交流を深め、新たな共同研究や連携の機会とすることを目的とし、ICReDDから4名、工学研究院から6名、情報

科学研究院から3名の講演が行われました。

シンポジウムは、前田 理ICReDD拠点長、瀬戸口 剛工学研究院長、長谷山美紀情報科学研究院長の開会挨拶に続き、4つのセッションに13名の講演者が登壇し、多分野に及ぶ最先端の研究発表を行いました。それぞれの講演に対し、総勢140名の様々な分野の研究者が、活発な議論や質疑応答を行い、今後の分野を超えた融合的研究への可能性が期待される良い機会となり

ました。最後に、実行委員を代表して久保田浩司工学研究院准教授から閉会挨拶が行われ、シンポジウムは盛会裏に終了しました。

ICReDDでは、様々な分野の研究者との融合研究を展開するため、今後もこのような形で各部局とのシンポジウムを開催していく予定です。

(工学研究院・情報科学研究院・化学反応創成研究拠点 (ICReDD))

講演一覧

セッション1

1. 大野 宗一 教授 (工学研究院) "High Performance Computing and Cross-Scale Approach of Solidification in Metals"
2. 富岡 克広 准教授 (情報科学研究院) "III-V Nanowire Devices and Their Prospects"
3. 美多 剛 特任准教授 (化学反応創成研究拠点) "Theory-Driven Approach to Chemical Synthesis of Difluoroglycine Derivatives and Its Application"

セッション2

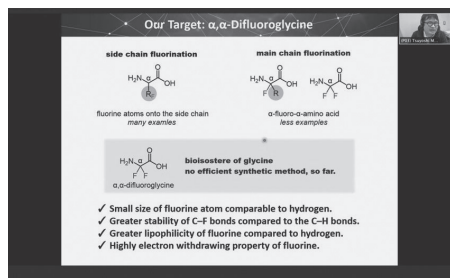
4. 三浦 章 准教授 (工学研究院) "Synthesis Design of Functional Materials using DFT Database"
5. 江丸 貴紀 准教授 (工学研究院) "Social Contribution using Robot Technology"
6. リヤリン・アンドレイ 特任准教授 (化学反応創成研究拠点) "Two-Dimensional Borophene: Structure Formation and Properties"

セッション3

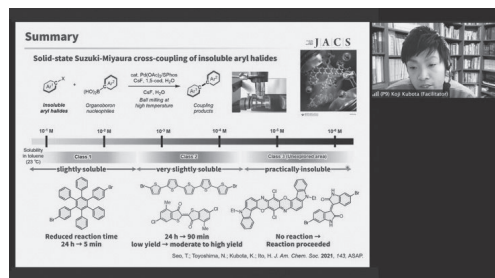
7. 石田 洋平 助教 (工学研究院) "Manipulation of Precise Molecular Arrangements and Their Photochemical Processes via Multiple Electrostatic Interactions"
8. 樋浦 諭志 准教授 (情報科学研究院) "Photoelectric Spin Information Conversion Using Semiconductor Quantum Dot"
9. 久保田浩司 准教授 (工学研究院) "Tackling Solubility Issues in Organic Synthesis"

セッション4

10. 北島 正章 准教授 (工学研究院) "Wastewater-Based Epidemiology as an Innovative Approach to Monitor COVID-19"
11. 國貞 雄治 助教 (工学研究院) "Atomic-Scale Analysis of Functional Materials: Spectroscopy and Density Functional Theory"
12. 小川 貴弘 准教授 (情報科学研究院) "New Era of Multimedia AI leading to Social Implementation"
13. 瀧川 一学 特任准教授 (化学反応創成研究拠点) "Machine Learning for Chemistry: Representing and Intervening"



ICReDDの美多 剛特任准教授による講演



工学研究院の久保田浩司准教授による講演

令和2年度現代日本学プログラム課程学士学位記授与式を開催

外国人留学生を対象とした4年間の学士課程プログラムである現代日本学プログラム課程（現プロ）の第3期生11名が、3月25日（木）に卒業の日を迎えました。卒業生は、学生交流ステーション111教室において挙行された現代日本学プログラム課程学士学位記授与式に出席しました。

現プロ学位記授与式では、山口淳二理事・副学長（現代日本学プログラム課程長）、高橋 彩総長補佐（現代日本学プログラム副課程長）をはじめ、同課程担当教職員が参列する中、山口理事・副学長から卒業生一人一人へ学

位記が授与されました。また、現代日本学プログラム課程最優秀学生賞及び現代日本学プログラム課程特別賞の表彰が併せて行われました。残念ながら、新型コロナウイルス感染症に関する水際対策の強化に係る措置により、最優秀学生賞被表彰者はオンラインによる出席となりましたが、ディスプレイを介して賞状と記念品の贈呈がおこなわれました。

引き続き、山口理事・副学長から卒業生へ祝辞が贈られ、母国を離れ異国の地での予備課程を含む4.5年間の長く険しい留学生生活を自らの糧にでき

たこと、またコロナ禍におけるグローバルな変容にも柔軟に対応し、それを乗り越えてきたことに対する労いの言葉に、卒業生は感銘を受けていました。

卒業生の多くは、卒業後に国内外の企業への就職や北大を初めとする国内の国立大学への進学を予定しており、日本の良きパートナーとして日本と世界の架け橋の一端を担っていくことが期待されます。

（学務部教育推進課）



山口理事・副学長と現プロ卒業生との記念写真

人獣共通感染症国際共同研究所を設置

人獣共通感染症リサーチセンターは、4月1日（木）付けて、人獣共通感染症国際共同研究所に改組いたしました。

人獣共通感染症国際共同研究所は、医学、獣医学、薬学、工学、理学及び情報科学等の研究者が結集した国内唯一の人獣共通感染症に特化した研究所

であり、その目的は、人類共通の課題である、人獣共通感染症の制圧にあります。研究所においては、人獣共通感染症病原体の自然界における存続メカニズムを解明し、その出現予測、予防と制圧を目指して全地球規模の疫学調査を展開するとともに、病原体の遺伝子および病原性や宿主域を決定する諸

因子を明らかにするために、今後も世界トップレベルの研究・教育活動を一層推進し、人獣共通感染症の「先回りパンデミック対策の実現」に向けて努力して参ります。

(獣医学系事務部)



除幕を行う喜田 宏統括（右）及び鈴木定彦所長（左）

人獣共通感染症国際共同研究所の設置

～北海道大学の人獣共通感染症リソースを3ユニットに結集～

① 人獣共通感染症研究ユニット (既存組織の再編拡充)

基幹ユニットとして、他の2つのユニットと強固な連携体制を構築し、**感染症研究を加速**



地球規模病原体探索とイノベーション創出による先回りパンデミック対策の実現



国際展開の強力な推進

細菌感染症
ウイルス感染症
原虫感染症

サーベイランスと新規予防・診断・治療法の実用化

生物製剤の研究・開発
バイオインフォマティクスの創薬応用
病原体の超微細構造解析と創薬
低分子治療薬の開発
リスク要因の洗い出しと対策立案

② 国際協働ユニット (GI-CoREの内在化)



海外より世界の第一線級の教員を招聘し、国際共同研究を推進

ワクチン・創薬研究
病原体ゲノム
病原体探索

③ 獣医学研究ユニット (獣医学研究院の感染症系5教室との連携)



越境性感染症の研究を展開し、その成果を大学院教育へ展開

越境性感染症のサーベイランス
プリオン病の発症機序解明
免疫療法の開発・実用化
節足動物媒介感染症の対策立案
寄生虫病の実態解明

獣医療分野で連携

動物医療センター



北海道大学

組織図

北海道大学スマート物質科学を拓くアンビシャスプログラム 第1期生採用式

2021年度北海道大学スマート物質科学を拓くアンビシャスプログラム（以下、SMatS）第1期生採用式がオンラインにて執り行われました。このプログラムは、博士後期課程の大学院生に対して、専門分野の研究にとどまらず、スマート物質科学力ならびに社会実装実現力を養成するものです。認定証の授与は、モニターに向かって武次徹也コーディネーターが11名のプログラム生に認定証を示し「貴殿はスマート物質科学を拓くアンビシャスプログラムの第一期生に認定されました。それを証明するとともにプログラム生として活躍されることを期待します」と言葉を添えて、手渡し演出によって行われました。

武次徹也コーディネーターの挨拶

1期生に採用されたみなさま、心よりお祝い申し上げます。北大の複数の大学院より11名を受け入れることになり、プログラム担当教員一同大変嬉しく思っております。採用の時期が修士論文発表会と重なり、応募に迷った方もいるかもしれませんが、自ら応募を決断し、選抜され、この場に集ったことに自信を持って下さい。SMatSの構想は2017年からスタートしました。大学院教育の意義や履修方法などについて、時間をかけて熟議し、

本日に至っています。本学では2013年に北海道大学物質科学フロンティアを開拓するAmbitiousリーダー育成プログラム（以下、ALP）が文科省に採択され、物質科学に数理科学と科学技術コミュニケーションを融合させ、5年間の教育を経てアカデミックや産業界で活躍するリーダーを育成してきました。SMatSはその経験知を生かし、さらに発展させようという試みです。

物質科学を広い分野で捉え、同時に数理科学、計算科学、データ科学の修得を目的としています。Society 5.0に求められている科学技術を先導し、イノベーションを実現できる人材を育成することを目指しています。本学の物質科学分野ではALPと並んで、2018年に世界トップレベル研究拠点プログラムとして化学反応創成研究拠点（以下、ICReDD）が採択されています。ICReDDではまさに計算科学、データ科学、実験科学を融合し、新しい有用な化学反応、あるいは新しい物質材料を開発するスピードの加速化に取り組んでいます。また、本学に所属する多様な研究者と国際チームをつくり、最

先端の研究に励んでいます。ここで得られた知見をSMatSに所属する物質科学分野の大学院生に提供し、人材育成につなげる本学独自の教育プログラムと位置づけられます。

みなさん、博士後期課程に進学し、自身の研究テーマが既にある程度確立していることでしょうか。このプログラムが提供する科目が、みなさんの研究テーマにすぐに直結し、役立つとは限りません。そのことに抵抗を覚える方もいるかもしれませんが、長い目で見ると、必ず役に立つ日が訪れます。繰り返しになりますが、今の時代、どのような分野においてもコンピューターシミュレーション、データ科学的アプローチが重要になっています。多様にラインナップされた講義、イベントに積極的に参加してほしいと期待しています。このプログラムの1期生として「スマート物質科学力」を磨き、ぜひ次年度以降のプログラム生の手本となってください。

（総合化学院、理学院、工学院、環境科学院、生命科学院、情報科学院）



モニターに向かって認定証を授与する武次徹也コーディネーター



SMatS 1期生と教員の集合写真

生命科学学院 博士後期課程科目「少人数討論型育成プログラム」 (北大帝人ブレインストーミングワークショップ) を実施

博士後期課程を対象とした大学院生命科学学院選択科目および大学院共通授業科目として、帝人株式会社と連携して「少人数討論型育成プログラム」

(北大帝人ブレインストーミングワークショップ) を実施しました。本講義は令和2年8月28日(金)から令和3年3月31日(水)までの間に全10回のワークショップとして開講され、大学院先端生命科学研究院の石原誠一郎助教が担当しました。今年度は3名の博士後期課程の学生(生命科学学院2名、工学院1名)が受講しました。第1回から第3回までは感染対策を講じたうえで対面開催しましたが、新型コロナウイルスの流行に伴う本学のBCPレベルの変更により、第4回以降はWebによるオンライン開催で実施いたしました。

本講義は平成19年度に初めて開講され、今回で14回目を迎えました。産学連携によるワークショップ形式の授業を通じて、少人数でアイデアを創出する方法論を学び、新規技術に関するアイデアを各履修者がまとめ上げ、プレゼンテーションを行うことを目標としました。また帝人株式会社から実際に研究開発に携わっているご担当者の方を本学にお呼びし、マーケティングや企業における研究開発についてご講義

いただきました。これらを通して、アイデア創出力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の育成を目指しました。

全10回の講義のうち計8回の講義でアイデアの創出とプレゼンテーションのブラッシュアップを行いました。アイデアの創出のためにブレインストーミング法を取り入れました。ブレインストーミング法とは、少人数のメンバーで自由にアイデアを出し合い、お互いの発想の違いを認め連携を行うことでさらに多くのアイデアを生み出そうとする思考法です。初回の講義ではお互いを知るためのアイスブレイキングとして、受講生各々の興味についてブレインストーミング法により共通点を探しました。2回目の講義以降は、各々が考えたアイデアを全受講生によるブレインストーミング法により発展させました。またプレゼンテーションのブラッシュアップも同様にブレインストーミング法により行いました。受講生は回を重ねるごとに活発に議論することができるようになり、プレゼンテーションの完成度を高めることができました。

1月14日(木)には、帝人株式会社から3名のご担当者様をお迎えしてワークショップを開催しました。受講生

がアイデアについて中間発表を行って内容について議論するとともに、マーケティングについての基礎と企業で研究開発を行う上で鍵となるポイントについて、帝人株式会社における研究開発の実例を挙げてご講義いただきました。これにより受講生は企業で行う研究開発の実際について学び、またイメージすることができました。

3月31日(水)には受講生に加えて帝人株式会社の3名のご担当者様にもご参加いただき最終報告会を開催しました。受講生は各自のアイデアについて最終発表を行い、帝人株式会社のご担当者様から多くのコメント・質問をいただきました。受講生はご担当者様と積極的にコミュニケーションを取り、アイデアについて深く議論することができました。さらに、受講生の将来についてもご担当者様から多くのご助言をいただきました。

本講義を進める上でお力添えいただいた帝人株式会社のご担当者様をはじめ、ご協力いただいたすべての方々へ感謝します。受講生の皆様がこの経験を活かし、産学含めどの進路に進むとしても大いに活躍いただけることを祈っています。

(生命科学学院・先端生命科学研究院)



第1回ワークショップの様子(感染対策を行っての対面開催)



第8回ワークショップの参加者のスクリーンショット(Web開催)

脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙

脳科学研究教育センターでは、4月1日（木）に本学エンレイソウ第1会議室において、今年度入学した履修生の開講式を行いました。

はじめに、渡邊雅彦センター長（医学研究院教授）から、祝辞とともに発達脳科学専攻の特色ある教育体制や研究指導内容について説明があり、新入生は、バーチャル専攻の特徴を活かした大学院教育に、大きな期待を示していました。

引き続き、出席した基幹教員と履修

生の自己紹介の後、小川宏人センター教務専門委員会委員長（理学研究院教授）から、修了要件についての説明と履修に関するガイダンスがあり、「所属学院・研究科の課程のみを修了する大学院生に比べ、より多くの単位を修得する必要があり、さらには当センターの合宿研修や発表会等で研鑽を積むことになり大変ではあるが、その経験は必ず将来の自信につながるので頑張ってください」との激励がありました。

今年度も新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、新入生歓迎交流会は中止となりましたが、参加者は所属大学院を超えて脳科学研究を学ぶ期待に胸を膨らませていました。

本専攻には、今年度10名の履修生（修士課程10名）が加わり、全体では29名の履修生が在籍することになります。

（脳科学研究教育センター）



渡邊センター長より開講式の挨拶



ガイダンスを受ける履修生



新しく加わった履修生と基幹教員

■ 諸会議の開催状況

役員会（令和3年4月12日）

- 議案・校友会・同窓会連携委員会の設置について
- ・クロスアポイントメントの適用について
 - ・北大フロンティア基金運営委員会の設置について
 - ・諸規則の制定について
- 協議事項・新たな年俸制の導入及び業績評価制度等の見直しについて
- 報告事項・総長補佐の任命について
- ・令和3年度学部入学者数について
 - ・時間外労働の縮減に向けての全学共通の必須の取組について
-

教育研究評議会（令和3年4月21日）

- 議題・総長選考会議委員の選出について
- 報告事項・総長補佐の任命について
- ・学生の懲戒及び停学の解除について
 - ・ディスティングイッシュトプロフェッサーの称号付与について
 - ・産業創出講座等の設置・更新について
 - ・全学運用教員の措置について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学校友会・同窓会連携委員会規程

(令和3年4月13日海大達第100号)

校友会及び同窓会との連携基盤を強化し、同会の組織を活性化するため、本学に校友会・同窓会連携委員会を置くことに伴い、所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学北大フロンティア基金規程の一部を改正する規程

(令和3年4月13日海大達第101号)

国立大学法人北海道大学北大フロンティア基金運営委員会規程

(令和3年4月13日海大達第102号)

北大フロンティア基金の戦略的な募金活動を展開し、本学の財政基盤を強化するため、本学に北大フロンティア基金運営委員会を置くことに伴い、所要の改正及び定めを行ったものです。

■人事

令和3年4月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【経営協議会委員】 (期間：令和5年3月31日まで)	河 合 江理子	京都大学名誉教授

令和3年5月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【経営協議会委員】 (期間：令和5年4月30日まで)	浅 香 正 博	北海道医療大学学長

資料

役 職 員 数

令和3年5月1日現在

部 局 等	職 種	総 長	理 事	監 事	小 計	教 授	准教授	講 師	助 教	助 手	小 計	URA職	専門職	事務職員	技術職員	合 計
役 員		1人	8人	2人	11人											11人
監査室														5		5
事務局														1		1
	総務企画部												4	101	12	117
	財務部													79		79
	学務部													91		91
	研究推進部													39	1	40
	施設部													10	27	37
	国際部													16		16
附属図書館														91		91
法学研究科・法学部						35	12		9	2	58		3	17		78
水産科学院・水産科学研究所・水産学部						23	29		24		76				38	114
函館キャンパス事務局														25	3	28
環境科学院・地球環境科学研究所						19	23		8	1	51					51
環境科学事務局														12		12
理学院・理学研究所・理学部						75	64	7	32	1	179		1		18	198
理学・生命科学事務局														43	2	45
薬学研究所・薬学部						15	6	10	22		53				3	56
薬学事務局														9		9
農学院・農学研究所・農学部						45	29	27	19		120				11	131
農学・食資源学事務局														25	1	26
生命科学院・先端生命科学研究所						12	6	3	6		27					27
教育学院・教育学研究所・教育学部						13	18	4		1	36					36
教育学事務局														8		8
国際広報メディア・観光学院 メディア・コミュニケーション研究院						27	28	1	2		58					58
メディア・観光学事務局														10		10
保健科学院・保健科学研究所						23	10	13	21		67					67
工学院・工学研究所・工学部						83	104	2	71		260		2		50	312
工学系事務局														65	3	68
総合化学院																
経済学院・経済学研究所・経済学部						20	17		4		41		1			42
経済学事務局														8		8
医学院・医学研究所・医学部						37	30	18	62	2	149				12	161
医学系事務局														43	2	45
歯学院・歯学研究所・歯学部						19	15	1	35		70				4	74
歯学事務局														11	1	12
獣医学院・獣医学研究所・獣医学部						18	15	1	13		47				3	50
獣医学系事務局														20		20
医理工学院																
国際感染症学院																
国際食資源学院																
文学院・文学研究所						51	32		8		91	3				94
文学事務局														17		17
情報科学研究所						43	36	4	16		99					99
公共政策学教育部・公共政策学連携研究部						10	9				19					19
北海道大学病院						3	12	50	81		146			126	657	929
低温科学研究所						13	9	1	19		42			7	9	58
電子科学研究所						15	14		17		46				10	56
遺伝子制御研究所						8	6	4	10		28				7	35
触媒科学研究所						8	6		6		20				6	26
人獣共通感染症国際共同研究所						6	5	4	7		22				2	24
スラブ・ユーラシア研究センター						7	3		1	1	12					12
情報基盤センター						7	5		2		14					14
アイソトープ総合センター						1			1		2				2	4
量子集積エレクトロニクス研究センター						3	3				6					6
北方生物圏フィールド科学センター						15	18		7		40			19	71	130
観光学高等研究センター						3	1				4					4
アイヌ・先住民研究センター						1	5		1		7					7
社会科学実験研究センター																
環境健康科学研究教育センター																
北極域研究センター						1	2		3		6					6
広域複合災害研究センター							1		1		2					2
脳科学研究教育センター																
外国語教育センター																
総合博物館						3	3		2		8					8
大学図書館							1				1		2			3
学生相談総合センター							2	1			3		3			6
保健センター						1					1				7	8
埋蔵文化財調査センター									1		1					1
国際連携研究教育局						(17)	(7)		(2)							
技術支援本部																
情報環境推進本部													2			2
アドミッションセンター																
人材育成本部							1				1					1
創成研究機構							2		1		3		1		8	12
創成研究機構化学反応創成研究拠点						(10)	(1)									
高等教育推進機構						7	8	2	9		26	1			4	31
サステイナブルキャンパスマネジメント本部																
安全衛生本部						2					2		1			3
大学力強化推進本部												11				11
産学・地域協働推進機構						1					1		5			6
総合IR室												2				2
国際連携機構						1					1	1	3			5
北キャンパス合同事務局														18		18
合 計		1	8	2	11	674	590	153	521	8	1,946	18	28	916	974	3,893

※国際連携研究教育局の職員数の()内は、北海道大学ユニットの本務者数で内数。当該職員は、原籍組織の職員数に計上。
 ※創成研究機構化学反応創成研究拠点の職員数の()内は、主任研究者 (P1) で内数。当該職員は、原籍組織の職員数に計上。

(総務企画部人事課)

編集メモ

● 理事・副学長コラムを開設

理事・副学長のお人柄や大学運営に対する想いが分かるコラムです。第一回目は広報室長も兼務されている吉見 宏理事・副学長。第二回目以降もお楽しみに！

理事・副学長コラムURL

<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/directors/>

QRコード



● 定例記者会見発表者募集中

P10でも紹介しています，定例記者会見の発表者を募集中です。自身の研究内容を広く社会に向けて伝える場としてご活用いただけますので，発表を希望する場合は各部局の庶務担当にご連絡下さい。



第一回目は新聞社の他，テレビ局の取材もありました。

● 情報基盤センターのしだれ桜

情報基盤センター北館前の2本の「しだれ桜」は毎年5月上旬頃に満開となり，その前の新渡戸通を行き交う人々の目を愉しませています。

しかし，残念なことに2年ほど前から「癌腫病（がんしゅびょう）」に罹患し，手当を施したものの年を追う毎に樹勢は衰えつつあります。

この美しい光景を見ることができるのもあと僅かかもしれません。



裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は夕暮れ時のメインストリートです。

5月5日（水）東京オリンピックマラソン競技のテスト走行も兼ねた「北海道・札幌マラソンフェスティバル2021」のランナーがキャンパスを走り抜けました。本番も選手は南門から入り，このメインストリートを通る予定です。

キャンパス風景 14 メインストリート（北9条西7丁目付近）



北大時報 ⑤ No.806 令和3年5月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2162 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>